

琉球大学学術リポジトリ

北海道と沖縄県高校運動部員の運動行動の適応性に関する比較研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2009-12-03 キーワード (Ja): 志向性, 地域差, 競技レベル キーワード (En): 作成者: 小橋川, 久光, 並河, 裕, 葉名尻, 享, 渡嘉敷, 通之, Kobashigawa, Hisamitsu, Namikawa, Yutaka, Hanajiri, Susumu, Tokashiki, Mitiyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13610

北海道と沖縄県高校運動部員の運動行動の 適応性に関する比較研究

小橋川久光* 並河 裕* 葉名尻 享* 渡嘉敷通之**

Comparison research on adaptability of movement
behavior of Hokkaido and Okinawa Prefecture
high school sports player

KOBASHIGAWA Hisamitsu¹⁾ NAMIKAWA Yutaka¹⁾
HANAJIRI Susumu¹⁾ TOKASHIKI Mitiyuki²⁾

キーワード：志向性、地域差、競技レベル

研究目的

最近、高校生を対象とした運動部におけるスポーツ経験に関連した研究が数多く行われてきている(青木・松本, 1997; 上野・中込, 1998)。中でも、部活経験が学校生活や日常生活との関連性を明らかにした研究が見られる。例えば、学校生活における部活を通して獲得される協調性、忍耐力、責任感や体調管理という資質が、日常生活を円滑に送る上で必要な能力、即ち、ライフスキルを身につけることと繋がる必要があると考えている(徳永 2002)。このとは、部活が単に競技場面でのパフォーマンスの向上だけでなく、一般的人間としての成長・発達を成し遂げることも競技スポーツに期待されている。また杉山(2004)は、スポーツ、体育場面で獲得されたスキルやその状況で必要とされる心理的特性は、同様に日常生活における行動にも少な

からず影響していると仮定し、さらに、スポーツ場面での対人行動に関わる心理的特性が、日常生活場面における社会的行動に影響を及ぼしていると予測している。さらに、徳永・橋本・高柳(1994)の研究によると、スポーツクラブの継続は、共通して協調性に優れており、所属経験が長くなるほど忍耐力、積極性、自己実現意欲、競争意欲、判断力においても優れた傾向が見られている。このような研究の共通項として括ることができる概念が「適応」であると考えられる。

適応は生物学的な意味あいでは、環境の条件に見合った形で生体の側に変化を生じさせることをさしている。つまり、生活環境にあわせて固体が自分の生存に適した体型や習慣を示したり、生理的变化を生じさせるようになる過程やその状態を適応ないし順応とよばれる。家庭、学校、職場などの社会的な環境との相互関係の中で、適応が人間にとって特に重要である。したがって、この場合の適応とは、積極的な個人の側からの環境への働き

*琉球大学教育学部 **沖縄県教育庁保健体育課

かけを含み、環境との間に調和のある満足すべき関係が保たれている状態といえる（佐藤1994）。

このような適応を2分割的に捉えた概念として、社会的志向性と個人的志向性があり、個人的志向性とは、自他分離方向を志向し、個性的・主体的に"個"としての自己を生かそうとするあり方。一方、社会的志向性とは自他合体への志向性を意味し、社会で共有された規範や"他者との関係性"を重んじ他者との調和的共存や社会への適応を目指すあり方をいう。つまり、前者は具体的には自律性や個性を尊重しようとするあり方を意味する。一方、後者は、他者との共存や相互依存への志向を意味する概念である（伊藤 1998）。

それをスポーツ場面において外的適応を志向する傾向をスポーツにおける社会的志向性とよび内的適応を志向する傾向をスポーツにおける個人的志向性として捉えている。即ちスポーツにおける社会的志向性は、チームの規範・規則の遵守、集団での役割遂行、選手間の良好な人間関係維持などについての志向性である。それに対し、スポーにおける個人的志向性は、スポーツ場面での個性や能力を発揮、信念や主張を貫くなど個人の内的基準への志向性で、スポーツを通しての自己実現に近い内容を意味する（磯貝 2000）。このような観点により磯貝らはスポーツにおける個人・社会志向性尺度を作成し（2000）、さらにこの尺度を用いて、異文化間の違いについてアメリカと日本の大学スポーツ選手を対象に比較を行っている（Isogaiら2003）。その結果は、スポーツにおける個人・社会的志向性も、社会文化的要因の影響を受けることを明らかにしている。例えば、日本ではスポーツ集団への外的適応と個性の発揮などの内的適応を統合して行うのに対して、アメリカでは両者を明確に区別して行う傾向があることを報告している。この結果から、本尺度は地域的差異を明らかにする尺度としても有効な尺度となりうるものと考えた。

わが国における地域的差異の比較を扱った

事例は多々あるが、中でも平均寿命の比較（伊藤 2004）、体格や性成熟の発達勾配現象（松田 1989）などがもっとも典型的な事例としてあげることができる。そしてその背後には、食習慣に関わる塩分やたんぱく質の摂取など文化的な違いや寒冷地と温暖地など気候的な差異が上げられている。その他地域比較は、交通事故、自殺、飲酒など（富永1994、座間味1997）、心理学的観点からも、このような関心がもたれてきている。

本研究は、地域的差異について、日本の中で最も北端に位置し、気候的にも厳しい条件にある北海道と最南端に位置し温暖な気候条件にある沖縄県を取り上げて、適応から見た心理的な側面の違いについて検討しようとする。即ち、季節がはっきりしており、特に冬場の厳しい自然条件の中で生活している北海道と穏やかな自然環境の中で生活している沖縄とでは、自然的、社会的適応に差が見られると予測される。このことが運動部活動を通して適応にどのような差となってあらわれるかを検証しようとする。そのため、運動部員一般を対象に比較するのではなく、厳格にスポーツ活動に投入している部員を対象とすることが比較研究として必要と考え、今回の研究対象は、2004年度県高校総体においてベスト4以上の成績をおさめたチームスポーツに限定し比較することとした。

同様に、運動部の厳しさの点から考えて、経験年数をつんでいるものや競技レベルが高い運動選手の方が経験年数の短い人やレベルの低い人よりも適応性において高い得点を示すであろう。したがって、本研究の目的は、具体的に以下の点を明らかにすることにある。運動部に所属している北海道と沖縄の高校生を対象に、高校における学校生活一般、運動部活動、体育授業およびスポーツ志向性のそれぞれにおける適応の程度について、地域差（北海道・沖縄）を中心に、性差（男・女）競技レベル差（全国・ブロック・県・その他）、経験年数（4年未満・7年未満・7年以上）について比較検討を行うことにある。

研究方法

1. 調査期間

北海道の調査は、2004年6月上旬から下旬に行った。沖縄県の調査は、7月上旬に行った。

2. 調査対象

北海道は、函館市内の3高校（函館地区道予選大会ベスト4以上）7スポーツ種目（バスケットボール、バレーボール、サッカー、ハンドボール、野球、ラグビー、ソフトボール）13運動部より男子23名、女子94名、合計122名である。沖縄県は、8高校（沖縄県総合体育大会ベスト4以上）4スポーツ種目（バスケットボール、バレーボール、サッカー、ハンドボール）18運動部より男子187名、女子100名の287名である。北海道と沖縄県との合計は、男子215名、女子194名、総計409であった。

3. 調査方法

北海道では、各学校の体育主任を通して、部活を担当している顧問に調査を依頼した。調査用紙の回収は調査後郵送法によって行った。沖縄県では、県教育委員会保健体育課を通して各学校の体育主任に本研究の目的および趣旨を説明し承諾の後、調査依頼を行った。調査用紙の回収は、調査後それぞれの学校を調査者が訪問し回収を行った。

4. 調査内容

本研究で使用した尺度は以下の4つの尺度である。

1) スポーツにおける個人・社会志向性尺度 (磯貝、徳永、橋本 2000)

本尺度は、個人志向性（8項目：例「スポーツをするときは自分らしさを大切にする」「周囲が反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる」など）と社会志向性（10項目：例「周囲の人に対しては、いつも誠意を持って接している」、「部活の雰囲気やメンバーの

つながりを大切にしている」など）の2因子から構成されている。評価は、いずれも「まったくあてはまらない（1）」から「とてもあてはまる（5）」までの5段階尺度である。

2) 運動部活動満足度尺度

(山本、徳永 2001)

本尺度は、運動部活動満足度尺度となっているが、運動部に満足することは適応していることと解釈し本尺度を使用することとした。また、山本らの尺度は中学生を対象としていたことから、因子構造については、再度因子分析（主因子法 バリマックス回転）を行い確認することとした。その結果、以下の5因子から構成された。目標試合への認知（5項目）、ポジティブ感情（2項目）、練習内容の評価（5項目）、指導者との関係（3項目）、チームへの適応（3項目）であり、合計18項目である。評価は5段階評価で行われた。

3) 体育授業に対する適応尺度

(佐々木 2003)

佐々木（2003）は、体育授業における心理的諸側面の統合的機能を「適応」と捉え、体育における適応を「主体が体育の授業を成立させている環境的条件に対して調和的關係にあり、安定しかつ自律的・自発的に運動スポーツの学習に取り組んでいる状態、あるいは、そのような状態を達成するために学習の目的や目標ないしは自らの内的な要請に従って自分自身や環境的条件を改変したりする過程」であるとしている。このような考えのもとにして作成された尺度は、体育授業における友人関係を志向した連帯志向（8項目）と体育授業の理解や教師への質問・相談などの体育適応（6項目）から構成されている。評定は5段階である。

4) 学校生活満足度尺度

(山本、徳永 2001)

本尺度も学校生活満足度尺度となっているが、満足していることは適応していることと

解釈し、適応尺度として用いることとした。本尺度は4因子から構成しており、教師に対する評価（3項目）、クラスへの適応（3項目）、友人との関係（3項目）、授業に対する態度（3項目）の合計12項目からなる尺度である。回答は、5段階で求められている。

5) フェイスシートにおける質問項目

- (1) 性
- (2) 学年
- (3) 出身地（北海道、沖縄県）
- (4) 競技レベル：最近出場した最もレベルの高い大会名（1. 全国大会、2. 九州（北海道）大会、3. 県（道）予選大会、4 その他
- (5) 経験年数：4年未満、7年未満、7年以上

5. 統計処理

すべての統計処理は、パーソナルコンピュータ用統計ソフト「SPSS12.0 J for Windows」を用いて、t検定、F検定、因子分析を行い処理した。

結果及び考察

1. 性 差

スポーツの個人・社会的志向性（磯貝ら(2000)において、女子の社会的志向性に有意に高い結果が見られたことから、地域差の検定には、性と地域との2要因による分散分析を行った。その結果が表1に示してある。検定の結果は、本研究において4尺度13因子いずれにおいても統計的に有意な性差を見出すことはできなかった。

2. 北海道と沖縄の地域差

本研究における主たる目的が、北海道と沖縄県の地域差について考察することであった。性と地域の分散分析の結果は、調査した4尺度13因子中10因子に統計的に有意な地域差が認められた。個人・社会志向では社会性因

子に有意差が見られ、社会的志向性で北海道が沖縄よりも有意に高い得点を示している。個人的志向性については、得点の上で沖縄県が高い傾向を示していたが、有意な差は認められなかった。以上のことは、沖縄県選手が個人的志向性で有意に高く、个性的であろうと予想されていたが、このことを証明するまでには至らなかった。従って、仮説的見解として述べるとするならば、沖縄県の選手は個人の自分らしさや自己主張を発揮すると同時に、特に社会性を磨くようにし、チームの雰囲気やチームメートの関係を高める努力が必要なことと思われる。しかし、磯貝ら(2000)が大学生を対象に作成した尺度得点と本研究の高校生の得点を比較すると、本研究の高校生の個人、社会志向ともに高い得点を示している。特に社会志向は大学男子35.05、女子37.26点で、本研究の高校生がとび抜けて高いことがわかる。したがって、北海道と沖縄との比較では社会志向性は北海道が高いが、いずれも大学生一般よりは高いことを示している。この結果は、標本を県高校総体ベスト4以上に限定した結果、大学生よりも高い結果となったものと思われる。また、大学生に比較して高校生の方が監督・教師の指導が厳格になされていることもこのような結果につながったものと解釈する。

部活動に対する尺度では、内容評価、指導関係、チーム適応において1%水準で有意に北海道のほうが高い得点を示している。これらは、先の志向性尺度の社会志向と高い相関関係をもっており、内容評価が0.54、指導関係が0.57、チーム適応が0.52の相関係数を示していた。以上のことは、これらの3因子が社会志向とかなり強い関連を持つことが伺える。

また、この2つの尺度とも、スポーツ活動と関連した尺度であったことも相関が見られたものと考えられる。

体育授業に対する尺度では、連帯志向、体育適応いずれも北海道の方が高い得点を示していた。中でも、連帯志向のt値が5.87と最

表 1. 各尺度の因子別性差および地域差

尺度	因子	性	N	平均値	SD	F 値	地域	N	平均値	SD	F 値
個人・社会志向性尺度	社会	男子	215	40.11	6.00	0.18	北海道	122	41.80	4.57	5.38
		女子	194	41.15	5.25		沖縄	287	40.10	6.03	*
	個人	男子	215	29.27	5.16	1.40	北海道	122	27.93	5.01	1.76
		女子	194	28.08	5.26		沖縄	287	29.03	5.31	
部活動に対する尺度	目標試合	男子	215	23.34	2.26	2.68	北海道	122	23.54	1.72	4.77
		女子	194	23.23	2.10		沖縄	287	23.18	2.34	*
	内容評価	男子	215	18.94	4.37	0.71	北海道	122	20.31	3.50	9.90
		女子	194	19.65	3.95		沖縄	287	18.84	4.38	**
	指導関係	男子	215	12.08	2.86	0.48	北海道	122	13.02	2.13	14.95
		女子	194	12.37	2.46		沖縄	287	11.87	2.81	**
	チーム適応	男子	215	13.35	1.95	0.24	北海道	122	14.07	1.25	14.65
		女子	194	13.64	1.72		沖縄	287	13.24	2.00	**
体育授業に対する尺度	ポジ感情	男子	215	8.86	1.50	3.79	北海道	122	8.87	1.40	1.56
		女子	194	8.61	1.53		沖縄	287	8.72	1.57	
	連帯志向	男子	215	32.13	5.03	3.65	北海道	122	35.22	4.31	17.09
		女子	194	33.87	5.45		沖縄	287	31.99	5.39	**
学校生活に対する尺度	体育適応	男子	215	22.54	4.03	1.16	北海道	122	23.12	3.78	5.80
		女子	194	22.22	4.14		沖縄	287	22.08	4.17	*
	教師評価	男子	215	12.05	2.84	1.88	北海道	122	12.23	2.71	3.08
		女子	194	11.82	3.01		沖縄	287	11.82	3.00	
	クラス適応	男子	215	12.41	2.75	3.94	北海道	122	13.21	2.38	12.88
		女子	194	12.37	2.80		沖縄	287	12.04	2.85	**
	友人関係	男子	215	13.75	1.56	1.44	北海道	122	14.11	1.45	9.15
		女子	194	13.68	1.92		沖縄	287	13.55	1.83	**
	授業態度	男子	215	10.88	2.76	0.27	北海道	122	11.34	2.36	4.22
		女子	194	10.93	2.68		沖縄	287	10.72	2.84	*

** p<0.01 *p<0.05

も大きく、平均値の差も大きい。連帯志向の質問項目は「友達といっしょに動き回るのが楽しい」、「体育の時間はできるだけ友達と活動するようにしている」、「励ましあったり教えあったりする友達がいる」などであり、人間関係から見た適応と捉えることができる。しかし、社会志向とはほとんど有意な相関は示さなかった。一方、体育適応は5%水準で有意な差が見られ、北海道の方がやはり得点は高い。この因子は、体育の授業の約束事や規則を守り、体育授業の価値を肯定的に捉えているかどうかを示す項目から構成されている。社会志向と0.4の相関を示していたことから、社会志向と関連性は連帯志向よりも高かった。

学校生活に対する尺度については、教師評価を除き統計的に有意な差が見られ、この因子においても北海道の方が高い得点を示していた。特に、クラス適応と友人関係は、1%水準で有意であった。

以上の結果から、個人志向性とポジティブ感情を除いて、有意な差が見られた尺度因子は、いずれも北海道の方が高く、それらはいずれも社会性と関連した尺度であった。したがって、本県の高校運動部は社会的志向性と関係する事柄、日常生活における規律や友人関係において、北海道の方が優れていると解釈される。

今後、地域性をより明確にするためには、地域間の標本抽出の仕方、集団スポーツのみな

らず個人スポーツについても配慮した標本抽出を行いながら明らかにしたい。

表2.各因子別・経験年数間の比較

尺度	因子	4年未満 M・N	7年未満 M・N	7年以上 M・N	df	F値 判定	多重比 較注)
個人・社会 志向性尺度	社会	M=38.89 N=89	M=40.90 N=180	M=41.23 N=140	2 403	5.15 **	2>1 3>1
	個人	M=28.12 N=89	M=28.50 N=180	M=29.34 N=140	2 403	1.75	
部活動に対 する尺度	目標試合	M=22.16 N=89	M=23.52 N=180	M=23.71 N=140	2 403	16.51 **	2>1 3>1
	内容評価	M=17.85 N=89	M=19.36 N=180	M=19.62 N=140	2 403	7.51 **	2>1 3>1
	指導関係	M=11.70 N=89	M=12.04 N=180	M=12.62 N=140	2 403	3.55 *	2>1
	チーム適応	M=13.00 N=89	M=13.58 N=180	M=13.66 N=140	2 403	4.29 *	2>1
	ポジ感情	M=8.47 N=89	M=8.69 N=180	M=8.97 N=140	2 403	2.88 *	
体育授業に 対する尺度	連帯志向	M=31.94 N=89	M=33.11 N=180	M=33.41 N=140	2 403	3.18	
	体育適応	M=21.46 N=89	M=22.54 N=180	M=22.73 N=140	2 403	3.68 *	2>1
学校生活に 対する尺度	教師評価	M=11.40 N=89	M=11.93 N=180	M=12.30 N=140	2 403	2.70	
	クラス適応	M=11.63 N=89	M=12.58 N=180	M=12.63 N=140	2 403	4.10 *	2>1 3>1
	友人関係	M=13.34 N=89	M=13.69 N=180	M=13.99 N=140	2 403	4.50 *	3>1
	授業態度	M=10.28 N=89	M=11.07 N=180	M=11.08 N=140	2 403	3.02	

注) 経験4年未満・・・1、4年以上7年未満・・・2、7年以上・・・3

** p<0.01 * p<0.05

3. 経験年数及びレベルの違いによる因子の比較

表2は、経験年数を4年未満、7年未満4年以上、7年以上の3群に分け、性と経験年数によるF検定とティキユー法による多重比較を行った結果を示している。13個の因子中8個の因子に有意な差が認められた。

差の見られた因子は、経験4年未満(1)よりも経験4年以上(2)経験7年以上(3)の方の得点が高いことを示している。部活動に対する尺度の5因子すべてに有意な差が見られているのが経験年数から見た結果である。一方表3は、競技レベルの差(全国レベル、九州レベル、県レベル・その他を含む)によ

表3. 各因子別競技レベル間の比較

尺度	因子	全国 M・N	九州 M・N	県・他 M・N	df	F値 判定	多重比 較注)
個人・社会 志向性尺度	社会	M=41.44 N=89	M=40.93 N=145	M=39.91 N=175	2 403	2.33	
	個人	M=89 N=28.58	M=28.24 N=145	M=23.91 N=175	2 403	0.40	
部活動に対 する尺度	目標試合	M=23.75 N=89	M=23.61 N=145	M=22.78 N=175	2 403	9.91 **	1>3 2>3
	内容評価	M=19.37 N=89	M=19.68 N=145	M=18.89 N=175	2 403	1.12	
	指導関係	M=12.81 N=89	M=11.84 N=145	M=12.22 N=175	2 403	3.79 *	1>2
	チーム適応	M=13.58 N=89	M=13.76 N=145	M=13.22 N=175	2 403	3.53 *	2>3
	ホジ感情	M=8.97 N=89	M=8.84 N=145	M=8.54 N=175	2 403	3.12	
体育授業に 対する尺度	連帯志向	M=32.71 N=89	M=33.78 N=145	M=32.71 N=175	2 403	0.85	
	体育適応	M=23.02 N=89	M=22.35 N=145	M=22.35 N=175	2 403	1.22	
学校生活に 対する尺度	教師評価	M=12.85 N=89	M=11.66 N=145	M=11.71 N=175	2 403	5.80 **	1>2 1>3
	クラス適応	M=13.25 N=89	M=12.19 N=145	M=12.12 N=175	2 403	5.41 **	1>2 1>3
	友人関係	M=13.98 N=89	M=13.92 N=145	M=13.42 N=175	2 403	4.79 **	1>3 2>3
	授業態度	M=11.69 N=89	M=10.59 N=145	M=10.77 N=175	2 403	4.22 *	1>2 1>3

注) 全国レベル・・・1、九州レベル・・・2、県レベル・・・3
** p<0.01 * p<0.05

る各因子を比較したものである。この表の特徴は、部活動の3因子に差が見られるが、学生生活に対する尺度の4因子全てに見られることである。表2と表3は対照的な結果が見られている。運動経験としては、経験年数の差が運動特有な因子に、競技レベルの差が学生生活の差によく反映されている結果であった。また、仮説として、経験年数の長いほど競技レベルの高い者ほど、因子得点は高くな

るものと考えたことは、概ね証明していると考えられる。

以下の文章は本結果と直接関係するものではないが、日夜高校生の練習と関わっておられるコーチが記述した文章であり、それなりに高い成果を上げている競技のコーチの文章であるが故に重みのある文章であるので付け加えておく。これは、2003年度沖縄県高校陸上競技部会の合同合宿が西崎陸上競技場で

行われた際の配布資料に記述されていたことである。本県のスポーツ選手の特徴を示すものとして興味深い資料である。

「本土の選手やコーチが沖縄のスポーツ選手に対する批評として、情けが厚く親切であり、生活しやすい土地柄である。しかし、その一方で、「挨拶」「時間の厳守」「約束を守る」など基本的なことに問題があると厳しい指摘をする。本土と沖縄との競技力の差は、ズバリこのような基本の差である。生活面や行動の面にも表れている。練習に取り組む姿勢や態度そして考え方が競技力を左右するといっても過言ではない。成果の出来不出来の理由をけして環境や他人のせいにならない。原因自分論に徹する選手であることが大切である。そして、驕の大切さ、厳しい環境でこそ大会に強い選手が育つ。」と記してあった。

要 約

本研究は、北海道（122名）と沖縄県高校運動部員（287名）を対象にし、運動行動の適応と言う観点から北海道と沖縄県の比較検討することを主たる目的としていた。そのため、2004年度高校総体において、上位4位までのバレーボール、バスケットボールなど、集団スポーツを対象に、北海道122名、沖縄県287名を対象に調査した。用いた尺度は1）スポーツにおける個人・社会志向性尺度、2）運動部活動満足度尺度、3）体育授業に対する適応尺度および4）学校生活満足度尺の4尺度である。

その結果、社会的志向で北海道が5%水準で有意に高い得点を示し、個人的志向は沖縄県の高いことが予想されたが、得点は高い結果を示したが、有意な差は見られなかった。その他、3つの尺度においても、11因子中9因子で北海道の得点が有意に高かった。

今後は、個人スポーツも対象にすること及び標本抽出の歪みをなくし違いを明らかにしたい。

付 記

本研究は、沖縄県体育協会スポーツ医科学委員会との共同研究として行われた。

本研究を進めるにあたり、標本抽出にご協力いただきました北海道と沖縄県の部活動の顧問の先生方、生徒の皆さんに記して心から感謝申し上げます。

引用文献

- 青木邦男・松本耕二（1997）高校運動部員の部活動適応感に関する心理社会的要因 体育学研究 42 215-232
- 磯貝浩久・徳永幹雄・橋本公雄（2000）スポーツにおける個人・社会的志向性尺度の作成 スポーツ心理学研究 27-2 22-31
- 磯貝浩久（2002）スポーツ選手の目標設定と目標志向性 健康と競技の心理 徳永幹雄編著 不味堂出版 133-143
- Isogai,H.,Brewer,B.W.,Cornelius.A.E.,Etnier,J., and Tokunaga.M（2003）Across-cultural analysis of goal orientation in American and Japanese Physical education students. International Journal of Sport Psychology. 34 80-93
- 伊藤美奈子（1998）人間の発達をとらえる際の2方向性概念の提唱 心理学評論 41-1 15-29
- 伊藤諱一郎（2004）最長寿県の苦悩と挑戦 沖縄県対長野県 ライバル物語 産経新聞特集部
- 松田岩男（1979）体育心理学 大修館書店
- 佐々木万丈（2003）体育授業に対する適応：中学生の場合 体育学研究 48 153-167
- 佐藤有耕（1994）適応と問題行動 心理尺度ファイル：人間と社会を測る 堀洋道・山本真理子・松井豊編 垣内出版 570-597
- 杉山佳生（2004）競技社会的スキル及びスポーツにおける個人・社会志向性と日常場面での向社会的行動との関係 健康科学 26 41-48

- 徳永幹雄・橋本公雄・高柳茂美 (1994) スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処スキルに及ぼす影響 健康科学14 5 8-68
- 徳永幹雄編 (2002) スポーツ選手のメンタルヘルス 健康と競技のスポーツ心理 不昧堂出版144-177
- 富永大介 (1994) 復帰20年間の沖縄の交通事故に関する一考察—沖縄県、石川県、北海道の比較を通して— 沖縄心理学研究 第17号 28-29
- 上野耕平・中込四郎(1998)運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究 体育学研究 43 33-42
- 山本さつき (2002) 中学生の学校生活満足度と運動部活動 健康と競技の心理 徳永幹雄編著 不昧堂出版 167-177
- 吉田康宏・徳永幹雄(2002) 運動スポーツ経験とライフスキル 健康と競技の心理 徳永幹雄編著 不昧堂出版 156-166
- 座間味宗治 (1997) 沖縄県のアルコール関連問題の動向 沖縄心理学研究 第20号 52-54
- 沖縄県高校陸上競技合同合宿資料 (2003) 競技者の心 沖縄県選手の強さと弱さ 西崎陸上競技場において